

ノイズ・パフォーマンスにおける感覚経験

—非常階段の事例研究—

劉 璽鵬 大阪大学人文学研究科博士前期課程

本発表は、1980年代以降の日本ノイズ文化を代表する非常階段の活動のうち、異ジャンルとの共同企画「合体プロジェクト」に焦点を当て、その現場で立ち上がる身体的・物質的・空間的变化を記述的に明らかにすることを目的とする。既存の JAPANOISE 研究は、シーンや美学、言説分析に比重が置かれ、ライブ空間で実際に生じる身体経験や物質環境への着目は相対的に乏しい。本発表では、彼らのライブを構成する身体的・感覚的プロセスそのものを分析対象とし、ノイズ文化の感覚的構造を明らかにしたい。

まず、非常階段が異ジャンルとの共演を開始した背景には、キーパーソンである JOJO 広重が十代の頃に抱いた着想「フォークの背後でノイズが鳴っていたら面白い」がある。この発想は、ジャンル横断を目指す理論的構想というより、異質な音や身体が接触する場面で何が起ころのかを試す素朴な実験感覚に支えられていた。非常階段の合体企画は、この初期の感覚的関心の延長線上に位置づけられる。

本発表では、代表的な事例を参照しつつ、これらの企画に横断的に見られる「感覚的变化」に着目する。第一に、音響的強度が身体へ直接働きかける現象が挙げられる。音は「聴かれるもの」を超え、空間全体を揺らす物理的な力として作用する。第二に、物質の投入による空間の再構成がある。魚、生肉、臓物、生麺といった湿度や匂いを伴う大量の物質がステージから客席へと飛散することで、空気の質や温度、床の感触までもが変化し、音響と切り離せない感覚環境が形成される。これらの物質は象徴性よりむしろ、身体感覚を直接揺さぶる媒体として機能する。第三に、観客の身体反応の違いが場の様相を大きく左右する点である。速度感と圧倒的なパワーを特徴とするバンドとの共演では緊張や警戒が前景化し、観客は距離を取る傾向がある一方、パンク系との企画では物質投擲が祝祭的に受容される場合もある。さらに、アイドルとの合体では、揃った動きやコールがノイズの暴力性と同時進行し、異質な身体性が交差する独特の共同的興奮が生成される。つまり、同様に「暴力的」なパフォーマンスであっても、その受容は観客の身体性を媒介として大きく変容する。

以上の検討から、非常階段の合体プロジェクトは、単なるジャンル融合や話題性の追求ではなく、異質な身体・物質・音響が同一空間に投げ込まれた際に生じる不確定な出来事そのものを試験する実践として理解できる。暴力性が恐怖として立ち上がる場合もあれば、祝祭や遊戯へ転換される場合もあり、その振れ幅の大きさこそ非常階段の文化的核心を成している。

総じて、非常階段の合体企画には、音・物質・身体・空間といった諸要素が多層的に関与し合い、その場固有の経験を生成していることが明らかになった。これらの実践は特定

【 JASPM37 セッション A-2 】

の理論的意図よりも現場性や偶発性に依存して展開しており、ノイズ文化の柔軟性を示す好例でもある。非常階段の活動は、ノイズ文化の理解に有益な視角を与えるとともに、多感覚的なライブ経験をいかに記述し得るかという課題に対し、分析素材を提供していると考ええる。